

私共のスズキ・メソードの指導の大きな柱に子供と親、そして指導者の連携があります。お教室で指導者は子供と向き合うと同時に、一週間のご家庭でのおけいこの仕方をお母さま（時にはお父様、そしてお祖母様）にお伝えします。そして一週間、お母さまはご家庭でお子様と向かい合い、本当にこの時期でしか味わうことのできない親子の濃い時間をヴァイオリンを通して、またピアノを、そしてチェロを通して過ごします。

『ところで、「親が日常をどう生き、ことあるときにどう立ち向かうかということが、こどもへの最上の教科書である」と津田塾大学の伊藤昇先生は述べておられる。同じような意味の言葉は枚挙にいとまがない。

「子どもは親の後ろ姿で育つ」などは、ごく一般に言い伝えられている代表的な言葉である。

この外に「父の徳行は、子への最上の遺産なり」（イギリス俚諺）

「悪しき父も其の子の悪しきは願わず」（イギリス俚諺）

「疑心深き親は狡猾なる子を作る」（ハリバートン）

「秀才教育に必要なものは暗示と本である」（オストヴァルト）

などなど。

このように、古今東西多くの人々が、自分たちの生活経験から得たものを、感動を含めて後世に言い伝えている。

ところで私は、これら一連の言葉の中に共通した教えのあることに気付くのである。これは「子育てとは子供だけをそだてようとするものではない。親と子ども共に育っていかなければならない」教師に対して、ドイツで最初の教師養成学校の校長ディスカル・ウイッヒは「進みつつある教育者のみ、人を教える権利あり」と教え諭している。

人の子の親に対しても、同じように「進みつつある親にのみ、子供を育てる資格がある」と呼びかけたい。これこそが子育ての決め手であろう。いや、教師や親だけでなく、人間として最上の生き方ではないだろうか。』（日高實康）

正に故鈴木鎮一先生の教えと共通する。

今回のコラムではこの日高實康氏の著書よりご紹介させていただきます。

『タクシーに母子四人が乗り込んできた。運転手さんは三、四歳ぐらいの男の子が手に持っているシュークリームが気になった。発車しても男の子は指の間からクリームをはみ出させながら、食べていた。若い母親は、おんぶしている子をあやしているが、シュークリームを持った子を注意しようもしない。

運転手はバックミラーをのぞきながら、

「坊や、汚さないようにするんだよ」

ところが母親は、

「運転手さんが汚しては駄目とっているでしょう」

荒々しく子どもに言うだけで、子どものなすがままにさせていた。

運転手さんはハラハラしながら、落ち着いて運転も出来なかった。

下車することになり、

「運転手さんがうるさいから、早く降りな」

子どもを急がせ、乱暴にドアを閉めた。

後部の座席はシュークリームで汚れていた。

「一時が万事」という言葉がある。このような母親のもとで育っていく、子どもの将来がわかるような気がする。人に迷惑をかけない、他人の注意に耳をかたむける、社会生活のルールを守る。このことは社会人としての守るべき基本である。』子育ていい話 気になる話（日高實康）